

## 第67回埼玉県美術展覧会審査評

### 【第5部 書】

審査主任 町田 玄洞  
まちだ げんどう

書道展の出品数はいずれの展覧会においても年々減少してきている事実があります。少子化や社会情勢の変化が影響しているのは間違いのないところですが、人生の幅を広げる美術に興味を抱いて貰えないのは残念なことです。

そうした中、心配された県展書部門の出品数はほぼ昨年度並みで安堵したところではあります。

県展の入選の厳しさは十分に周知されているでしょうが、鑑査及び審査担当者としても毎回改めて実感させられます。いつもとは一味違う作品を出品する意識がなければこの壁を突破できないと考えるべきです。

今回展の鑑査及び審査は可能な限り丁寧に進めたとの自負があります。例年問題となる誤字脱字ですが、今回は大分少なかったとの印象でした。引き続き慎重な字調べをお願いしたいと思います。

以下の短評は審査員が分担し、最後に文体を揃えてまとめたものです。参考として頂ければ幸いです。

・埼玉県知事賞

「白居易詩」

齋藤 青穂

シャープな線がリズムカルに進展する中、良くほぐれた渴筆が時々顔を出して絶妙の調和を見せています。文字の大小の変化も自然で、程良い行間や字間が美しい余白を生み出します。行末も伸び伸びとして決して窮屈ではありません。多様な線と工夫された字形が淡墨の妙味と相まって格調高い作品にしています。特に二行目「獨臥」の連綿は、濃淡、造形、筆さばきに魅了される箇所と思います。

・埼玉県議会議長賞

「何景明詩」

水野 澄篁

ややもすると面白さばかりを求める昨今、このように真正面から構築性の高い隷書体に取り組む姿勢は評価に値するものと思います。懐の広い構えと深く紙に食い込む重厚な筆線は、他を圧する存在感を示します。画数の多い字の連なりや逆に疎画の文字の処理には繊細な配慮が行き届いているところもご注目頂きたいと思います。

・埼玉県教育委員会教育長賞

「杜審言詩」

鈴関 春翠

中国の明末清初の書家である王鐸<sup>おうたく</sup>を長年に亘り臨書されたようで、それが作品の根底に流れていることを覗かせます。縦方向への流れよりも筆線の横への活躍が顕著で、作品の情緒といったものを高める要因になっているようです。文字の大小の変化や字間の余白の取り方に配慮し、明るさを演出していますが、全体の印象としては墨量豊かな堂々とした作品に仕上がっていると感じます。

・埼玉県美術家協会賞

「菅家詩句」

飯室 緑川

書き出しの墨量を控え目にした点が功を奏しました。墨継ぎの文字をやや太めの線で強調し、書き進むに従って生ずる墨量の変化に無理がありません。やがて柔らかな渴筆が表れますが、その間の濃淡の移ろいが見事で、明るくありながら力強い作品としています。一行目「化」の造形は巧妙で、終筆の力強さが印象的です。行末も伸び伸びして、特に二行目の最後「徳」は余裕さえ感じさせます。

・埼玉県美術家協会賞

「奮鱗翼」

島田 素貞

刻された印文そのままに、羽ばたき輝いた作品と見ます。「奮」の下に大きく空間を取って、「鱗」では込み入った字にもかかわらず光りを感じさせ、最終の「翼」で全体の動きを統合させています。明るい躍動感を見る者を楽しくさせる雰囲気を持ち、側款は素朴さに稚拙味を加味して親近感を覚えます。作品全体として見た時、印影と側款の拓との間隔や天地の空間バランスも良好に収められていると思います。

・埼玉県美術家協会賞

「王維詩」

星野 青楊

この作品の特徴はやや強い右肩上がりの横画にあると思います。その統一感が、すっきりとした近代的な印象を与えて爽快です。文字の構成は直線主体で字幅を狭めた形体が多く、それにより行間の白を際立たせることになります。文字の大小の工夫や所々に配した太い筆線が作品効果を上げています。

・さいたま市長賞

「ほのぼのと」  
おおたに せいふう  
大谷 青楓

「ほのぼのとあかしのうらの」で始まる有名な古今和歌集の歌を十数首連ねた細字の作品です。前半にゆったりと空間をとって徐々に密度を高めます。後半には豊かな大きな山を見せて、静かに収める表現様式としています。構成面、墨色、線質共に申し分なく、上品な「かな」の美しさを充分に表現した作品になっていると思います。

・さいたま市議会議長賞

「常建詩」  
じょうけん し いけだ りょうえん  
池田 涼園

全体に細身の深い筆線で構成され、墨の濃淡、文字の大小や線質の変化に工夫が見られます。一行末「永和」、二行末「桃花」や三行末「溪」など行末に大字を配したことで作品に安定感を与えています。一文字中での微妙な線質変化に特長があって、一行目の連綿「楊林」ではそれに文字の大小と墨の濃淡とが相乗して効果を上げた箇所だと思っています。繊細で品の良さがある作品といえましょう。

・東京新聞賞

「七里灘」  
しちりたん かきぬま こうひん  
柿沼 香彬

粘りのある力強い筆が最大の魅力だと思っています。同時に気迫に満ちた一貫性と鋭さも持ち合わせているように感じます。文字の大小を工夫した大きさの異なる文字群同士を適度な余白を挟みながら構成して行きますので、全体として立体的に見えるのが特徴です。二行目辺りにそれが遺憾なく発揮されています。

・埼玉新聞社賞

「りとうし李燈詩」

はぎわら萩原 あきこ彰子

七言律詩56字をこの紙面に収める技量は、日頃の鍛錬の賜でありましょう。思い切った文字の大小は、それぞれの行に幅の変化を与え大きなうねりとなって流れを作ります。それに余白への配慮や横画の角度変化が働いてリズムカルな作品としているものと思います。渴筆に筆圧を掛けながら粗さを見せないのは巧みな筆さばきによるのでしょう。

・埼玉県美術家協会会長賞

「しんせいのばんぼう新晴晩望」

しまざわ島澤 ろしゅう鷺舟

まず感ずるのは、筆の抑揚を生かした表現の上手さだと思います。これにより筆線に太さの変化が生まれますが、特筆すべきは渴筆部分で筆が浮かずに紙をしっかりと捉えていることです。また構成面では、二行目上部「樹」の終画が目を惹きますが、これだけ大胆にしてもこの行の字数は一行目より一字多いのです。その辺りの巧みさに驚かされます。

・高田誠記念賞

「せいじふせつ成事不説」

いとう伊東 きゆう鬼游

金文を白文で表現し、右二字の動きは大変興味深いものです。「成」の右に流れる線と「事」の頭の右に突き出た線の絶妙な絡み合いにまず目を惹かれます。さらに「事」の左に伸びた二本の力強い線が素晴らしく、効果的に働いています。「不」は単調になりがちなところを線の太細変化で、「説」は偏旁を上下にずらす巧みな技を駆使します。観る者に感動を与える作品と思います。